

第11回

東北まちづくりOM勉強会 in 盛岡

それぞれの復興元年

— 語られる「復興」から、自ら思い描き、拓く「復興」へ —

震災から一年が経過し、道路の復旧や住宅の再建などが急がれる今、一人ひとりの生の充実に向けて議論を尽くすこと、考え抜くことにもこだわりたい。盛岡勉強会は、講演、事例報告、トークセッションを通じ、支援者・被災者の垣根を越えた「それぞれの復興元年」を考える契機にしたいという願いを込めて開催されました。2012年5月12日（日）、岩手県盛岡市「ホテルルイズ」を会場に、全国から208名の参加者が集いました。

基調講演 1 『首長パンチ みちのく復興編』

■ 今でも変わらないこと…「反省しない。謝りません。」

自分の人生含めて**仕事は振り返りません**。ろくな人生歩いてませんから(笑)。とにかく前だけを向いて、横のつながりに手に手をとっていくってのは関心はあるけれども、過去こういうことをやりました、失敗しましたというのは“くそくらえ”です。そんなのはおいていきましょう！でも、これ、議会で言うと怒られる。そして僕はよく暴言します。「議員に質問する資格はない！」って、つい興奮して一般質問で言っちゃうんですね。結局、議長に促され発言撤回。あげくの果てには「**市議会は無法地帯だ！**」と言った。これで新聞に載っちゃうのはうちぐらい。**そしてすぐ謝罪**。これがワンセットなんですね(笑)。

武雄市では、**市議会視聴率が50%**を越えてます。ユーストでも流してます。

観るときは、700人～800人が見えます。なぜでしょう？

僕は市議会で、「努力します、検討します。」ってことを言ったためしがない。

ほとんど答弁書も読みません。だから、たまに違ったことを言って職員を驚かす。

これをショック療法といいます(笑)。いわば**議会をエンターテインメントの場にしちゃう**んです。そうすると、僕がこれをやりたい、やる！って決めたことが**市民に伝わる**わけですね。また、それを僕は期待しているし、とにかくうちの議会は最高に面白いですよ。



佐賀県 武雄市 市長
樋渡啓佑氏

■ 世界人口の中で、中国、インドに次ぐ第3位は…フェイスブック

さあ、ここで問題です。世界で**人口の多いところ**を多い順に3つ挙げてみてください。

1位は？…そう中国、13億人。2位は？…インド、11億人。では3位はどこでしょうか。アメリカ？インドネシア？…違います。

フェイスブック！3位はフェイスブックなんですよ。すごいですよ、だって**8億人！**やってない人は今日からやりましょう！

日本で何人やってると思います？公式の数字で1,200万人。だから**日本人の10人に1人**がフェイスブックをやってるんですね。なんでこれがウケたかっていうと、要はこれ、出会い系。だけど、あくまでまじめなやつですよ。

例えば、「この人知り合いじゃありませんか？」で元カノが3人並んでしまったり、小学校の時から切れてた友達とフェイスブックで復活したりということがよくある話なんですね。だからアメリカでは今、2.5人に1人がフェイスブックをやってるんですね。

しかも、**平均年齢が約60歳**。なぜかっていうと、引越しが多いし、職業も転々と変わるし、国土も広い。だからつながりが切れる。だけど、フェイスブックは実名登録だからそれで**またつながる**ってわけなんですね。



■ 全国初・武雄市HPをフェイスブックに完全移行。アクセス数は66倍に！

これまでの市のHPを閉鎖して、フェイスブックページに一元化。移行することによって、リアルタイムの情報発信が可能になり、それに対してどれだけの人が関心を持っているのかが、『いいね』ボタンのワンクリックで理解できる。更に新たなコミュニケーションの活性化にもつながるだろう。

フェイスブックに移行したことで、登録ユーザーであれば、市の活動やイベント情報に『いいね』ボタンを押したり、コメントを投稿することができる。もちろん市長も自由に参加。自治体のHP完全移行は全国初だという。

HPをフェイスブックに完全移行！これ、やりたかったんですねえ。

だって、これで、実際に行政を進めている職員自身が、自分たちが進めている施策、自分たちがやってる仕事が本当にいいのかっていうことが分かるんですもん。今、これだけ**価値観が多様化**していて、よく分からないんですよ、私も。

1,800万。この数字って分かります？去年の8月1日にうちの“旧石器時代”のHPをフェイスブックに切り替えたんですね。その8月から3月31日までのアクセス数です。ちなみにうちの人口は5万人です。イノシシは3万頭。この人たちが有権者だったらどんなにいいんだろ(笑)。

1,800万人の人が見てるわけですよ。ちなみに月単位で330万ですよ。HPの移行については、よく検討してきたんですけど、移行前は5万人/月です。だから**66倍**の人たちがフェイスブック見てるんですね。しかも、それがどんどん流れてくる。情報を取りに行かなくても。その人たちが『いいね』を押してくださると、その**反応が更に広がっていく**んです。



■ 僕のなかのキーワード。First、Fast、Change、Share！



僕はいつもとにかく最初にやることにこだわります。「**BE FIRST**」。でも、フェイスブックなんてどこもやれるじゃないですか。初めにやることによって、これが必ずニュースになる。これ、2番手以下ってニュースにならないんですよ。

もうひとつが、早くやること。「**BE FAST**」。スピードは最大の付加価値です。止まっている水は淀むばかり。とにかく水が速ければ速いほど、人が。面白がって乗ってきて、色んな意見が出る。

そして「**CHANGE**」。しょっちゅう僕なんか変わっています。朝令暮改という言葉がありますが、武雄市には朝礼朝改って言葉があるんですよ(笑)。

そして、「**SHERE**」。僕がどんなに色んなことを言っても、これがシェアされないと一歩も進まないんですよ。職員たちの中でも、上の頭が固くてなかなか進まない…っていう言い方をする人がいます。そんな話を聞いたとき、そのことの善し悪しは別として、それが**共有されているかどうか**っていうことをもう1回判断してほしいって話すんです。

■ 失敗してもいい。チャレンジもせずに失敗するぐらいならやって失敗しろ！

ここで、武雄市のフェイスブックの取組みをバックアップしてくれてる株式会社シーズの杉山社長からお話していただきましょう。

<以下、株式会社SIIIS(シーズ)代表取締役社長 杉山さんのお話>

樋渡市長のお話の中で、**市長の話の7割方が拒否される**って言ってましたけど、樋渡市長の面白いのは、普通どこの市長も絶対失敗したって言わない。そんなことを言ったら、市民もすごく怒りますよね。でも、それは、全くとって市民にとって不利益の行動だと思えます。人って失敗できないって思ったら、失敗しないことしかなくなるからです。

皆さんはどうですか？新しいことをやる時に、必ず成功するって思えます？僕はそんなふうに思えないです。だから**人の失敗にも、寛容であるべき**だと思うんです。いい加減なもののはダメですけど、チャレンジしての失敗だったら、それをむしろ**褒める社会**にした方がいいと思います。きっとそれが今、武雄市が元気に見える理由なんじゃないでしょうか。

市民がそれを許容してるところが、武雄のおもしろいところなんですね。だから、どこの自治体も武雄市みたいになれるんです。でも、そのためには**市民も寛容にならなきゃダメ**です。日本がおかしいのもそこにあると思うんですよ。失敗を許さない文化に。

■ これからは『共感』を発信する時代。共感を得る施策かどうかが成功のカギ



フェイスブックを活用して**武雄市の物産販売**を展開していますが、北九州市在住の方で、武雄市になんのゆかりもないけど、でも武雄市が大好きという方がこのサイトから武雄市の物産品を購入します。そこで「やっぱりおいしい！」と評価すると、次に**誰かにこの商品の良さを教えた**ってなるんですね。それで、この方はご近所の方におすそ分けする。田舎ってこういう文化がまだ残ってるじゃないですか。そして、いただいた方は、バックに『詳しくは武雄市物産販売サイトを見てね』なんて書いてあると、じゃあ見てみようってなるじゃないですか。そして、もし野菜が切らしたら、どうせならここで買っちゃおうかってなるんですね。こういう施策って成功しやすいんですよ。

つまり、今までは情報を発信するだけの時代だったんですけど、これからは**「共感」を発信することで成功する時代**になってるんです。ですから、成功と失敗を分けているものは、それが共感を得る施策だったかどうかということが、これからすごく重要になってくると思います。

■ インして、共感したら乗っかる！新しい情報発信モデル『iSOPS（イソップス）』

この「共感」が同調するとどうことが起きるか。1つ事例を挙げると、フェイスブックをきっかけに**武雄市のファン**になった東大阪市のおばちゃんがあります。この方、大阪で開催するイベントに毎週来てはレモングラスを全部購入し、周りの方に「私の好きな武雄市のレオングラスです」って配りまくるほどの武雄ファン。このおばちゃんと「樋渡市長との出会いはツイッター」という北九州市在住の福田さんという女性。全然違う地域にお住まいのこの2人が**「とっっても武雄市好き！」という共感がきっかけ**で交流しちゃったんですよ。すると何が起きるか？この2人がとんでもない行動に出ました。なんと**「チーム武雄ラブ」**って作ったんですよ。佐賀県武雄市が好きな人、この指止まれっ！これが今、『いいね』が300くらいあるんですよ。ここまできたらこれは成功ですよ。そして、こんな動きを樋渡さんが「嬉しい」って言うことで益々広がっている。こんなふうにつながっていくのが、今の時代なんです。

AIDMA（アイDMA）って知っていますか？これは、広告でよく使われる整理の仕方、広告業が始まったときから使われていたものなんです。この手法は、まずはCMなどで注目を引くように宣伝します。それを見て興味を持ったら、今度、買いたいなって頭の中に刷り込まれて、お店でその商品を見掛けたら、「そうそう、私これ買おうと思ってたんだ！」って購入する。この流れを創り出すことがこれまでの広告の手法だったんですね。ですから、広告って必ずマスメディアが皆さんに伝えるって形で動いてきたんです。

ところが、最近変わってきた。今、テレビや新聞がなくても完結するように**情報がぐるぐる回り始めてる**んですよ。フェイスブックを見たり、ツイッターで呼びかけたりする中で、おいしいお店を探す。情報共有する。今、そういう世界になっています。いわゆる**共感の時代**なんです。この共感の時代を創り出したフェイスブックやツイッターというツール。**じゃ、この次は何か？**

最近、**SIPS（シップス）**っていう論理を言い始められています。共感したら、それがホントにいいものなのかっていうのをやっぱりグって確認して、参加して、共有拡散するという仕組みなんです。これを樋渡市長にお話ししたら、なんか、しつくりこなかったんですね。その理由というのが、まず確認するということが気に入らない。

フェイスブックはそんな冷たいものではなく、**乗っかるもの！**共感していいと思ったら、乗っかるんだ。確認するなんて、フェイスブックの世界にはなじまない。最初は自分がインしなきゃ、自分がのめりこまなきゃならないんだ！というそんな思いから、ソーシャル時代の新しい自治体情報発信モデル**「iSOPS（イソップス）」**に取組んでいます。

この「共感」って**皆さんでも起こせる**んですね。

武雄市がどこにあるのかなんて分からなくてもフェイスブックがあると、「武雄」を知ってる。今日もこれだけの人たちが樋渡市長の話聴講しに来るわけです。皆さん、なんて物好きなんだろって思うんですけど、じゃあ一体何が物好きにさせているかっていうと、それはやっぱり「共感」があるからです。今までの自治体のHPを考えた場合、多くはAIDMAモデルの一方通行です。だから、注目もされないし、興味も湧かないから、行ってみようっていう気にもならないんですよ。

ですから、これからはフェイスブックなどをうまく活用して、iSOPSモデルでどんどんエバンジェリストを生み出すような形を創っていく。**まずは自らが乗っかって、観光して、共感して、それを自分で宣伝する**ような形に持っていく。これが、これからの時代、成功のカギを握っているんじゃないかなって分析してみました。

<以下、株式会社SI||S（シーズ）代表取締役社長 杉山さん談>



■ 一歩超えたサービスを提供。武雄市図書館とツタヤの連携



今の武雄市立図書館もすごくいいんですけど、更に留まることなく、市民環境を上げようという想いから、**ツタヤ(CCC)と組もう**思ったんですね。今までは、図書館って公務員がやらなきゃいけないってなるから閉館日があるんですよ。でも、サービスに休みなんてあるわけじゃないんですよ。だから、それができる事業者をやってもらいましょう。ただ、図書館というのは、病院と違って、絶対に公立が運営なきゃならないんですよ。しかも図書館というのは無料ということが図書館法で決められています。これをですね、**指定管理者制度を活用**してツタヤに運用を委ねるんです。

これからは365日、お正月もやります。しかも開館時間も延びます。Tカードが使えたりカフェスペースを併設したり等。CCCは日本を代表する世界一の企画会社ですから、**ニーズを一歩超えた**、居心地の良い空間になるサービス提供できるようにこれから考えていただければと思いますね。

■ 思いついたらすぐ行動！スピードは最高の付加価値

でもね、連携に至るまでは**弊害もあった**んですよ。どういうことかっていうと、図書館とツタヤは隣接しているんですが、ツタヤは午前10時から夜中の1時まで開いてる。しかも365日でしょ。それでね、うちの図書館もあんなふうにやってくれないかって図書館の職員に相談したんですよ。もちろん、それは無理です。惨敗でした。

そこで思ったんですよ。ツタヤの人に公務員になれって言ってもそれは無理。当然、公務員の人にツタヤになれって言うのも無理だと。そう思った時に、**じゃあツタヤに任せよう**ってなったんですよ。

思いついたらすぐ行動。そこでいろんなツテを辿って、CCCの社長さんとお会いできたんです。それで、図書館の運営をツタヤにお任せしたいって言ったら、俺もだよって言い始めちゃって。どういうことかっていうと、**ツタヤは電子書籍を6万点所有**してます。だけど、電子書籍を閲覧するだけでもすごく規制が厳しいんです。その点、図書館は図書館法というバリアがあって、**電子書籍の閲覧もOK**ってことになってるんですね。これでがっちり握手したわけなんですよ。

だから、そこからこの話、**3ヶ月でまとまった**んですよ。だから**スピードは最高の付加価値**だというのは、ここにあるんです。もし僕がここに飛び込んでいかなかったら、この話、誰もが思い浮かぶはずなんです。誰もがツタヤにやってもらえばいいあって。ここで、一番最初に飛び込んだことによって、これがモデルとなるんです。**武雄モデルが創れる**んですよ。

■ 『感情』『共感』を発信してほしい！そして、その想いをシェアしていこう！

最後に、「**行動なくせば機会なし**。」100の議論より1の実行なんですよ。やっぱね、**動く**と**必ず人がついてくる**んですよ。それともう1つ。もう情報は流さなくていいんです。特に被災地の皆さんたちにぜひ申し上げたいのは、受け手からすると、**情報は格段に減っています**。昨年の今頃からすればもう**1/100以下**です。どうしてか？情報はもうみんな知ってるんですよ。ですから、これからは是非、**『共感』を発信してほしい**ですね。褒めるでもいい、かわいそうでもいい、とにかく**『感情』を発信してほしい**んですよ。そうしないと僕らには届かない。だからぜひ**『共感』を発信してほしい**。

そして、**大事なのは、皆さんのその『笑い』**です。笑いがないと、人生とか仕事にはなりません。特に被災地ですと、少し不謹慎な話になるけれども、あんまり深刻すぎると伝わらないし、伝播しないんですよ。ですから、陸前高田市でもすごくやってますけど、ボランティアの人たちが、被災地を案内してるでしょ。そのお話を聞いてるとね、被災だけの深刻なお話じゃないんですよ。そこに笑いがあったり、助けてもらった時のエピソードなんかを交えて話されているから、それが広がってる一つの要因なんだと思えるんですよ。ぜひ皆さんもそういう気持ちで、僕たちと**その『想い』をシェア**できればと思います。



**NO Laugh
NO Life**

【編集】岩手県釜石市 宮本 光
宮城県栗原市 鈴木 敬



岩手県 陸前高田市 副市長
久保田 崇 氏

今の「**官僚に学ぶ仕事術**」(マイコミ新書、2011年5月)から抱いていたイメージは、積極果敢に、バリバリと物事を進めていき、自分の時間もつくりだす人でした。きっと、そういうパワーもお持ちだと思うのですが、会場での第一印象は**穏やかな方**でした。講演でも大切なことを穏やかに伝えていただきました。そして、会場には久保田副市長と霞ヶ関で活動されていた「**チームK**」の方もいらっしゃいました。

■ 久保田氏と陸前高田市との出会い

佐賀県武雄市長の樋渡氏は内閣府の先輩(著書によると、採用試験後の官庁訪問で樋渡氏が職員として学生の久保田氏に面会)。樋渡市長と陸前高田市の戸羽市長は「青年市長会」の同志。

震災後の平成23年5月に、樋渡市長から内閣府の久保田氏に陸前高田市に行かないかとの誘いがあり、陸前高田市へ。

平成23年8月、久保田氏が陸前高田市の副市長に就任する。久保田氏は市内にアパートをさがすが物件がなく、隣町に居を定めた。

■ 震災から1年3ヶ月…。陸前高田市の現状と課題

市役所は**むこう7～8年はプレハブ庁舎のまま**ではないかとのこと。ワタミの渡邊社長が市の参与になっている。地元の経営者向けのセミナーも開催いただいた。また、ワタショクの東日本のコールセンターを陸前高田市に設け、70人を雇用した。

市役所庁舎の敷地内に、**青年市長会で「復興支援センター」を設置**。自治体職員がスタッフにいるが、「青年市長会」への派遣なので、市役所とは違う立場で活動している。

「がれき」が報道で多く取り上げられているが、地元にとっては**震災に伴う多くの問題の一部分**にすぎない。

震災により陸前高田市職員68人が亡くなった。現在、中途採用者、他自治体からの派遣職員を含めて300人と震災前と同規模の職員数になった。しかし、**仕事は震災前より増えている**。まずは**被災地を見てほしい**。見た現場の支援にはならなくても、いつか、何かの役に立つ。

復興活動の事例報告1『東京だからこそ、できることがある』

私は岩手県盛岡市出身の大学4年生です。2011年の10月にSAVE IWATE東京支部を立ち上げ、**東京からの復興支援活動**を行っています。メンバーの多くが岩手県出身の学生で、豊島区要町にある岩手県学生会館(岩手県出身の学生が入居できる学生寮)を拠点に活動を行っています。私たちが特に重視したのは、「**豊島区との連携**」です。豊島区の公民館や図書館を回り、地域の商店街にあるお店を一軒一軒回って支援物資の募集のチラシを配りました。地道な活動が実を結び、12月上旬には豊島区のNPOの中間支援を行っている「**NPO法人としまNPO推進協議会**」の代表さんと知り合うことができました。

ここから**豊島区内でのネットワークがどんどん広がっていきま**した。豊島区民の皆様から多くの支援物資を頂き、広報には区の広報課や地元のケーブルテレビ、新聞社が協力してくださりました。また、豊島区内で活動している複数のNPOとつながり、復興応援グッズの販売会を開催したり、三陸産ワカメをふるまったりすることが出来ました。現在は、区の地域区民ひろば課と一緒に、東北から豊島区に避難した方々向けのコンサートを企画しています。

豊島区は2012年5月にWHO(世界保健機関)が認証する「**セーフコミュニティ**」に認証されました。セーフコミュニティとは**安心・安全なまちづくりを推進する自治体**に与えられるもので、国内で5例目の認証となりました。また、豊島区は「**文化芸術創造都市**」を掲げ、文化政策に非常に力を入れてきました。このように豊島区が**積極的にまちづくりに取り組んでいたこと**が、私たちが受け入れられた大きな理由だと思っています。

豊島区の皆様への支援なしには私たちの活動は成り立ちませんでした。今日は自治体の職員の方々が多く参加されていますが、皆様の地域にも私たちと同じように、**復興支援のために活動をしている団体**が多くあると思います。皆様もそのような団体を見つけ、**活動の幅を広げる手助け**をして下さればと思います。発表時間が5分だったこともあり、非常に緊張しました。初参加にも関わらず、登壇の機会を頂きありがとうございます。懇親会で知り合った方のご縁で豊島区のお隣、文京区でもいくつか販売会が決まりました。東北OMのネットワークの広さを肌で感じる事ができました。

(一般社団法人SAVE IWATE東京支部代表 佐々木 敦斗)



SAVE IWATE
寺井 良夫 さん
佐々木 敦斗 さん

復興活動の事例報告2 『女子学生の発想で被災地の経済的支援を！』



復興girls*
野中里菜さん
阿部夏美さん
米沢あゆみさん

私たち復興girls*は、2011年3月11日に起きた東日本大震災をうけ、**仕事面での復興を手助けしたい**と考え、イベントを通して被災地支援を行ってきました。イベントの企画にあたって私たちは**販売をお手伝いさせて頂く企業さん**を見つけることから始めました。友人同士で発足し、活動し始めたため分からないことや戸惑うことも多くありました。何をしなければいけないか、どう進めていくか、本当に手探りのまま当初は企画に取り組んでいました。そもそも企画というものの自体について経験がなかった私たちにとって外部の方々との交渉はとても大変で、直接打ち合わせの際には様々な面で**自分たちの甘さを痛感**しました。「企画書に企業側のメリットが書かれていない」など厳しく指摘されたこともありました。

イベントでは**被災地の様子をしっかりと伝えたい**と思い、私たちは沿岸に足を何度も運び、実際に現地を見て、被災地に住んでいる方々の話を聞きました。現地に足を運んでいるうちに復興を目指す方々を繋ぎ、また被災地に住んでいる方々の復興の**心の支えになるものを作りたい**と考え「松光」という高田松原を使ったキーホルダーと「カラフル」というコースターを商品開発しました。

活動を通して**さまざまなことを学びました**。復興支援活動はもちろんの事、企画書の作成、外部との交渉、お金の管理、手続きという作業を行い、よい経験となりました。この企画は、やり始めたときは自分たちだけでしたが、本当に多くの方々に支えられて成功することができました。大学の先生に相談した際に紹介していただいた盛岡手づくり村の佐々木さんをはじめ、**たくさんの方と出会い、関わることができました**。

これからも活動を継続していこうと考えていますが、イベントだけでなく、今回の東北まちづくりオフサイドミーティングのような地域のために活動をされている方々と交流をし、自分たちの活動にいかせることを考えていければと思います。今後も東北のために活動されている方々と交流をし、「東北について」をともに考え、今以上に東北と一緒に盛り上げていければと思います。

(岩手県立大学3年 復興girls*リーダー野中里菜)

復興活動の事例報告3 『思い出を返していくためにできること』

昨3月11日の震災以降、私は津波で流されてしまった写真やアルバムなど、いわゆる**「思い出の品」の整理**に職務として関わってきました。ひとつでも多くの思い出を元の持ち主へ返そうと、今も多くの方が被災地の内外で様々な活動を行っています。去る5月の東北OM盛岡勉強会で、私は宮古市の写真救済活動について紹介させていただきました。ここでは、その時話したことの概略をレポートしようと思いましたが、あれから早2ヶ月が経ちました。思い出の品を取り巻く状況も、私自身の考え方も、**刻々と変化し続けています**。勉強会で話した内容をそのまま書くよりも、「**今”感じていること”をお伝えした方が良い**」と思い、改めて内容を再構成して、私が思い出の品と関わってきた中で考えたことや感じたことを、少しでも皆さんにお伝えしたいと思います。

これほど多くの思い出の品が一度に散乱してしまったこと。そして、持ち主がわからなくなってしまった思い出の品を誰がどのように取り扱うかということは、おそらく**過去にあまり例のないこと**だと思います。ある日突然、あなたがこの問題と向き合うこととなったとしたら、あなたなら一体どうしますか？東北OMは現在、自治体職員だけでなく企業人や学生など様々なバックグラウンドを持った方々で構成されていますが、おそらく自治体職員とそれ以外の方々とはこの問題の考え方や解決に向けたアプローチの仕方は大きく違ってくるのではないかと思います。大切なのは、組織の一員としてどう判断し行動するかではなく、**私ならどうするかということ**だと思います。



岩手県 宮古市役所
那波昌幸さん

私は、あなたが担当しなさいと上司に言われたその瞬間、**直感的に「これは私にはできない」**と思いました。自治体としてこの問題に取り組むとしたら、関係法規に則り他自治体の動向も踏まえつつ住民の意向を尊重して慎重に対応するのが自治体職員のひとつのあるべき姿というか、正解なのかもしれません。ですが、そんなことをしていたらすぐに「できない」の壁にぶつかるのは明らかだし、その壁を乗り越えていかないと、思い出の品を一刻も早く元の持ち主に返すという本来の目的に近づいていくことはできません。

私だけ、自治体だけでこの壁を乗り越えることはできない。そう思いました。

幸いにも、思い出の品を持ち主に返すという取り組みには**多くの方が手を差し伸べてくれました**。被災してしまった人たちのために自分にできることは何かを真剣に考え、せめて泥にまみれた1枚の誰かの大切な思い出の写真をきれいに洗うことなら自分にもできるかもしれない、そう考えてくれた多くの方が、ボランティアで駆けつけてくれました。私にできたことは、そうした方々に**「よろしく願います」**とお願いをすることだけでした。

自治体ではできないことを、できる人にお願いする。ただそれだけのことなのですが、そこにも壁はありました。いちばん大きく厚い壁は、**私たちの「職業意識」という壁**かもしれません。それは職務を全うするという責任感だったり、皆を守るという意識だったり、相手に迷惑をかけられないという気持ちだったり、様々だと思います。ですが、**その壁を乗り越えてボランティアや支援団体と自治体との協力体制を作ることができた地域とそうでない地域**とでは、取り組みに差が現れてきているように思います。

支援団体やボランティアの協力を得ることができたことで、宮古市の写真救済活動は軌道に乗り始めましたが、一方で別の気がかりが持ち上がってきました。それは、**活動の現場に地域住民がほとんど参加していない**という現実です。ひとつでも多くの思い出を元の持ち主に返すには、顔のわかる地域住民の協力が欠かせません。地域住民をいかに巻き込んでいくか。これがいま直面している課題です。

失われてしまった自分や家族の思い出の品を探すという作業は、自分の思い出を探すと同時に何人もの他人の思い出に触れる作業でもあります。これは**精神的にかなりハードな作業**です。将来のことさえはっきりと分からない今の状態で、思い出と向き合う気持ちになてなれないのも無理はありません。

今でも、**多くの思い出の品が持ち主を待っています**。持ち主が思い出の品と向き合う気持ちになれるのは何年先になるかわかりません。二度と持ち主の元へ帰ることがない思い出の品だってあるかもしれません。そうした思い出の数々を「保管期限がきたから」と処分してしまうようなことは、私はしたくありません。持ち主を待つ思い出の写真の中に映っているのは、**地域の記憶**でもあります。そうした**地域の記憶をどうしたら将来に繋いでいくことができるだろうか**。そんなことを今考えています。

地域の記憶を将来へ繋げていくためには、法的な面を含めてまだまだ乗り越えていかななくてはならない数多くの壁があります。ただ大切なのは、第三者の無責任な批判ではなく、**私たちの現場で起きていること**。それが全てだと私は思います。法解釈は時代によって、また地域によって違います。私たちはいま、震災前とは違う時代に生きているということを忘れてはならないと思います。**私たちが新しいルールや成功例を作り、それをみんなでシェアしていくことが大事だ**と思っています。



宮古市では、規模は小さいながらも思い出の品をお預かりする拠点を構えることができました。そこでは今日も、思い出の品を洗っている方がいます。時々、思い出を探しに来る方がいます。少しずつですが、活動が地域に広がり始めようとしています。**私がしてきたことは「お願い」だけです**。どうやってこの恩を返していけばいいのか、手を差し伸べてくれた多くの方の想いに応えていけばいいのか。私にはさっぱりわかりません。ただひとつだけ大切にしたいのは、**最後まで向き合うこと**。それが、お願いをした者の務めだと思っています。最後にひとつ、皆さんに知っていただきたいことがあります。**思い出が帰るその瞬間は、笑顔に溢れています**。それが、現実です。

(宮古市役所 那波 昌幸)

交流会

お待ちかねの交流会は、同会場で立食式で行われました。
司会は北上市役所の**宮崎詩織さん**と**佐藤美和子さん**の**美人コンビ**！

北上の伝統衣装にまつたお二人の登場にあわせ、ステージ周辺はカメラ小僧でわんさとあふれ、景品付きの交流ゲーム「**名前ピンゴ**」で大いに盛り上がりました～♪





新リーダー♪
おつかれさまっ

後藤さんの熱い説得に負け、イベント班リーダーになってしまいました。
前リーダーの伊藤美和子さんのように、気配りができるわけでも創造力が豊かなわけでも、ましてや美貌や人望があるわけでもありません。仕事に追われ精神的にも余裕がありませんでした。新イベント班として初の企画が、今回の盛岡勉強会の交流会でした。なかなかOMIに目を向けられないでいた私を手厚くフォローしてくれたのは、紛れもなく美和子さんでした。
「いつまでにどこまで内容を決めて」「誰が何をやり」「当日までの準備、当日の段取りをどのようにつくりあげるか」など、スケジュールや班員への周知方法も教えて頂きました。
また、実際班員にメールを出してみると、皆さんすぐに反応してくれました。アイデアを出してくれるだけでなく、明るい前向きなコメントもくれました。「みんなでつくりあげよう」とする意識の高さが皆さんから伝わってきて、正直ほっとしました。

当日も皆さんが積極的に動いてくれるので、私は何をするわけでもなく、むしろ皆さんの邪魔をしないようにすることが自分の役目でした。

ビンゴの景品は、参加者の皆さんに喜んで頂けたようでとても嬉しかったです。あれだけの大人数でビンゴに至るまでには時間がかかりましたが、だからこそ、当たった時の喜びがその分増えたのなら幸いです。

当日の衣装も備品の準備も司会の原稿も、すべて美和子さんです。「詩織ちゃんが忙しいのはわかってるから。余裕がある人が動くのが基本。気にしないで。」と暖かい言葉もくれました。「名ばかりのイベント班リーダーです。」と常に口にはしています。その名のとおりにイベント班は、メンバーの皆さん一人一人がリーダーなのです。
(岩手県北上市 宮崎 詩織)

『なんとビンゴで1等! 妻への良いお土産ができました☆』

「え〜と、米沢市の相田隆行さん!」「ハッ……ビンゴ〜ッ!!」地元の酒田で開催された勉強会以外では、初の交流会参加となった盛岡勉強会。勉強会の内容もさることながら、交流会のインパクトは強烈でした。なぜなら、交流会で催されたビンゴ大会で1番にビンゴになったから(笑)。しかも、記念に美しい進行役のお二人と写真を撮らせてもらったり…。酒田市恐妻組合青年部長の私ですから、賞品でいただいた盛岡3大麺セットは、相田さんには一つもあげず、もちろん妻に献上しました。(賞品でゲットしたことは内緒です☆)

そのビンゴ大会は内容も素晴らしく、参加者は近くにいた方に声をかけてビンゴのマス目に名前を書いてもらい、すべて埋まったところで進行の方が参加者の名前を呼びあげていく手法で、人見知りの私にとっては、非常に名刺交換がしやすかったです。

今までは時間と予算の関係で、勉強会の参加だけでも十分かなと思っていた部分もありましたが、人と人が、より密接なコミュニケーションをとるためには、飲食をともに時間を共有することが大切だと実感しました。フォーマルとインフォーマルというか、勉強会だけではつながらないものが交流会でつながるんですね。なにより楽しく、実りある時間を過ごせたと思います。この時の交流会がきっかけとなって、フェイスブックもやり始め、米沢で開催されたすき焼き交流会にも参加することができました。次回の勉強会でも交流会に参加すべく、常日頃から恐妻ポイントをこまめに貯めていきたいと思います!ただ、ちょっとしたことですぐに逆徳政令カードを使われるので要注意です。
(山形県酒田市 阿部 吉成)



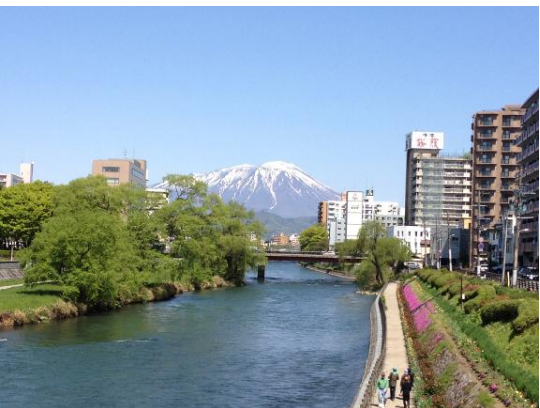
ぜひ相田さんにお礼を…!

会場を変え、2次会、3次会! OMの飲み会は続くよどこまでも〜…

そして! 盛岡では常識、飲みの締め冷麺♪



『“歩いて愉しむまち 盛岡”をのんびり散策 & 盛岡復興支援センター見学』



5月は盛岡が一番美しく輝く季節です。
新緑の鮮やかさと渡る風の爽やかさ、そして市中を流れる**川面**のきらめき。
 盛岡勉強会エクスカーションにはそのすべてが揃いました！
 参加者は、前夜の懇親会で**頑張りすぎて**2日酔いの方や、寝坊した方を含む**45名**。ボランティア・ガイド『**盛岡ふるさとガイド**』の案内により、5つの小グループに分かれて盛岡駅前の開運橋をスタート。開運橋からは北上川の緩やかな流れと盛岡人の**ソウル・マウンテン**『**岩手山**』を眺めることができます。この日の岩手山は残雪を湛えた美しいフォルムで遠方からの客人を歓待してくれました。

その後一行は、盛岡のまちなかを散策しながら、かつての南部藩主の居城『**盛岡城跡公園**』(写真右)や2011年7月にオープンしたばかりの盛岡の新たな観光スポット『**もりおか歴史文化館**』を回遊したほか、東日本大震災の内陸避難者を支援するために盛岡市が開設した施設『**もりおか復興支援センター**』を見学。同センターでは、前日の勉強会で事例発表をいただいたSAVE IWATEの寺井代表が、復興支援商品として開発中のクルミ・ミルクをふるまってくれました。
 盛岡の歴史とまちづくり、復興支援の取組みにたっぷり浸かった2時間半。行程をすべてこなして、おつかれさま〜、と解散するか**思いきや**、お腹を空かせたみなさんはグループごとに『**じゃじゃ麺**』や『**くすみ蕎麦**』を食べに再び盛岡のまちなかへ消えていきました。これも**大事な復興支援**。
 みなさん、**ありがとうございました〜！**



盛岡勉強会感想



『**何気ない日常のなかにも、新しい事をはじめるときかけはたくさんある**』

宮城県角田市
 日下 裕紀

昨年から東北OMのメーリングに参加させてもらい、日頃のみなさんの**活発な発信力**に刺激を受けながら日々仕事に励んでいます。

今回の勉強会で一番楽しみにしていたこと、それは**樋渡市長の講演を生で聴ける**ということ。盛岡まで呼べてしまうのも、**東北OMの繋がり**の力だと改めて感じたところです。

樋渡市長からは、笑いの絶えない講演をいただき、こんな首長見たことない…というのが、率直な感想でした。『**スピードは最大の付加価値**』。この言葉は、有言実行している樋渡市長だから言える言葉かもしれませんが、100%同じでなくても、既存の別々な物を組み合わせるだけでもそれは新しい物になるということ。普段、何気ない日常の中でも気付いていないだけで、**新しい事をはじめるときかけはたくさんある**のではないかと考えさせられる言葉でした。

陸前高田市の久保田副市長からは、震災から約1年余りが経過してもなお**浸水区域には依然建物がない**ことや、2,100世帯もの家屋を高台に移転させるにも高台にスペースがないなどの問題点も挙げられました。

私たちは、震災の記憶を風化させないようにと頑張っていますが、**どんどん風化していつしまってるのが現状**だと思います。自治体で働く職員の立場で考えたとき、復興のさなかに被災地に行くことは邪魔になるのでは…と躊躇していた自分がいます。しかし、久保田副市長の『**被災地に来てほしい…、現状を知ってほしい…**』という言葉は、**躊躇していた人を被災地に向かわせる勇気**となった言葉だと思います。今回の勉強会での活動報告や講演をとおして、東北OMという絆がたくさんの人たちをつなぎ、良い結果につながっていることを改めて感じる機会となりました。準備に携わったみなさんお疲れ様でした。ありがとう盛岡…。ありがとう東北OM…。



盛岡勉強会感想



『公務員でも創造的に
なれるんだと実感！』

岩手県大船渡市
平野 桃子

大船渡市商工港湾部商業観光課の平野桃子と申します。今年の春に大学を卒業し、当市の職員になりました。出身は福岡県なのですが、昨年参加した大船渡市での**ボランティア活動をきっかけに**大船渡のこれからについて考えるようになり、大船渡の人と一緒にこの**町の今後を見届けるため**にはどうしたらいいかを考えた結果、こちらの市役所に就職することを決めました。

そして実際に役所で仕事を始めて1ヶ月が過ぎた頃に東北OMに参加させて頂いたのですが、役所の人に限らず**様々な立場の人**が東北の活性化に向けて活動してきていることを知り、私も役所の人間としてできることを精一杯やっていきたいと改めて思いました。また、樋渡市長の講演を聴くことで、**公務員でも創造的に活動していける**という実例を知ることができたのも良かったと思います。

これから皆さんと一緒に東北を盛り上げていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします！



『あったかい“志”のベクトル。
この熱を青森につなげたい』

青森県平川市
齊藤 望

東北道碓ヶ関ICから盛岡ICまで1時間ちよっと、OM勉強会が開催される盛岡市に1人で向かった。確実に知っている人は1名だけ…(笑) そんな**アウェイな状況**だが、会場はたくさんの人であふれ、あったかい空気が漂っていた。それもそのはず、この『空間』には**志のベクトル**が同じ方向を向いている200名を超える有志がいるんだ。

事例発表と講演は、**賛沢で刺激的な**内容が心のツボを刺激してくれたようで、なんだかとても健康になった気がした。

交流会ではたくさんの方と知り合うことができ、その出会いの数だけ**「もっと地域に飛び出せよ！」**と背中を押してくれたような気がしてとても心強く感じた。参加者はもちろんだが、主催者が楽しんでる祭りやイベントは否が応でも盛り上がる。今回は岩手県実行委員会の**あったかいもてなしと太くたくましいつながり**による運営力がうらやましく、ちょっぴり妬けた(笑) たくさんさんの学びと出会いに感謝して清々しい気持ちで会場を後にした。

この感謝の循環がたくさんの共感を生み、今もなお**でっかいスパイラル**となって東北OMは羽(輪・和・環)を広げ空に向かって根元なのだと思う。10月は**OM初の青森県での勉強会**。私も微力ながらホーム(津軽)での開催を盛り上げたい。

「それぞれの復興元年」

“オール岩手”で取り組んだ初の盛岡勉強会。
復興への絆がさらにかたく結ばれた。
岩手はひとつ！



NEXT

次回、第12回東北まちづくりOM勉強会は、
2012年**10月27日**(土) **青森県弘前市**で初開催！
ゲストスピーカーは**弘前市長**の葛西憲之氏。
市民のチカラを活かした市政運営とは…？
現在青森メンバーで絶賛準備中。どうぞ期待～！

「ねぶた祭に負けないぐらいの熱気で、
会場を埋め尽くしたいと思います
ふるってかだってください。
待ってらよ～！」



青森県六戸町 金淵 恵

